

吉田剛士のマンドリン・トーク

第15回 ゲスト：伍芳(ウーファン)

マンドリンは「心の琴線」に触れる、
繊細な響きの魅力的な楽器だと思います。



中国の伝統楽器・古箏(こそう)の演奏家として日本全国で活躍中、マンドリンの世界にも馴染みの深い伍芳さんにお話を伺いました。

2012年4月17日 神戸にて
伍芳氏(右)吉田剛士(左)

吉田：日本に来られてから何年くらいになりますか？

伍芳：1990年の秋からなので、今年で22日目になります。

吉田：日本で活動を始めるきっかけは何だったんですか？

伍芳：姉が京都大学に留学していたので、夏休みに両親と一緒に遊びに来たのがきっかけです。その時に人前で演奏する機会をいただいて、たくさんの方にすごく喜んでくれたんです。中国ではずっと学生として演奏していたので、発表会や試験の場ばかりでしたから、先生にも先輩にも、基本的には常に批判されてきたんです。ですから、日本で暖かく拍手を受けたことが嬉しくもあり、驚きでもありました。そのときは日本で古箏という楽器が全く知られていないことにも驚きました。

それでも、演奏を聴いて「感動しました」とか「中国の景色が目に見えます」とか言われて、その頃は全く日本語ができませんでしたが、自分の演奏で言葉以上に日本の方々と同じような感覚があったし、音楽には国境がないんだな、音楽は人々の心をつなげるんだな、と初めて強く実感しました。そして、日本琴奏者の安田弘子先生から、卒業したら日本に来て演奏活動しないかとお誘いを受けたんです。それでいろいろ考えたのですが、中国の古箏をもっと日本の皆様に紹介したいな〜と…。日本の印

象もすごくよかったし、来ることにしました。そうして日本での活動を始めたわけですが、今考えれば甘かったかもしれないと思います(笑)。

吉田：ファンさんの来日は、その後の女子十二楽坊などにもつながる中国音楽ブームの「はしり」のような気がしますが？

伍芳：それは時代の流れだったと思います。私が来日した頃、中国は改革開放という政策の時代で、やっと若い人たちが自由に留学できる体制になって、音楽家として海外に活動の場を求めることが可能になったんです。それまでは普通に海外旅行することすら難しい時代でしたね。

吉田：古箏について教えていただけますか？

伍芳：日本のお琴のルーツといわれていて、それ自体も改良されてきたんですが、今は21弦の撥弦楽器です。5音階(ペンタトニック)に調弦されていて、調によって琴柱の位置を変えます。それ以外の音は左手で弦を押さえて(バンドして)出します。

私は9歳の時に始めたんですが、はじめて先生のところへ行ったとき、その音色に涙が出るほど感動しました。一目ぼれですね。中国の伝統楽器には、二胡、琵琶、笛などありますが、古箏は「大きくて高い」楽器で、クラシックで言えばハープのような楽器ですね。私が始めたこ

ろはどちらかというと珍しい楽器で、奏者も少なかったんですが、今、この楽器は中国で大流行しているんですよ。経済が豊かになったこともあると思いますが、豪華な感じがいいみたいです。テレビドラマで楊貴妃やお姫様が弾くシーンが多いので憧れる人が多いんです。西洋楽器としてはピアノが人気あるんですが、伝統楽器では古箏の人气がダントツです。

吉田：そうなんですか。ところで演奏に関しては、同じ撥弦楽器として、マンドリンとの共通点もあるかと思いますが

伍芳：古箏は右手の、小指以外の4本の指に鼈甲のピックを絆創膏で固定して弾きます。マンドリンと同じようにトレモロもよく使います。昔は単音だけで、トレモロは使われていなかったんですが、50〜60年前に弦の数が21本に増やされてからは基本的な奏法の一つになりました。古箏の音は単音ではすぐに消えていきますが、トレモロを使うことで、音をつなげて歌うような表現ができるようになったのです。

吉田：そのあたりの流れはマンドリンの歴史とも通じますね。トレモロのコツとかありますか？

伍芳：古箏の場合は人差指で親指を支えて手で弾きます。ちょうどバイバイするような感じですね。レッスンのときは細かいスケッチをするような感じで、とも言ってます。



プロフィール：伍芳（うーふあん）

中国・上海生まれ。9歳より中国古箏の第一人者、王昌元氏より手ほどきを受ける。その後、中国で最も難関といわれる上海音楽学校に入学。郭雪君氏に師事し、古箏を中心にピアノや音楽の基礎理論などを幅広く勉強する。

1990年7月同校を首席で卒業し、来日。1996年9月に東芝EMIよりデビューアルバム「箏心」をリリースする。日本における現在の中国楽器ブームの先駆けとなる。

その間、南こうせつ氏、伊勢正三氏、東儀秀樹氏（雅楽師）、中西俊博氏（ヴァイオリン）、木乃下真市氏（津軽三味線）、西村由紀江氏（ピアノ）、溝口隆氏（チェロ）など数々のアーティストと共演。多数のTV・ラジオ出演のほか、2002年には古谷一行氏の朗読とのコラボレーション（言の葉コンサート・ツアー）、狂言、人形浄瑠璃文楽、和太鼓との共演、皇太子様、雅子様の前での御前演奏等々、意欲的な演奏活動を行っている。また、さだまさし原作の映画「精霊流し」に音楽で参加している。

2004年2月25日には、映像付きの初めてのベストアルバム「万華鏡」をリリース。同年5月には、ハワイにてグラミー賞受賞アーティストのSAX 奏者、KENNY G と共演し高い評価を得る。これがきっかけとなり、同年7月のKENNY G JAPAN TOUR 全箇所ゲストとして参加する。

2006年5月には、ドイツで開催された「Euro Festival Zupfmusik 2006」に参加し絶賛される。

近年、教育活動にも積極的に取り組み、2007年4月より神戸市看護大学の非常勤講師として「感性・身体表現」を担当。最近では、古箏教室を開き古箏の普及にも努めている。

2010年上海万博においては、オリジナル曲を中心とした音楽劇「彩虹橋」で公演を行い、故郷である上海で自身の音楽活動にエポックを画するようイベントとなる。そして同年12月には、その音楽劇の再演を神戸で実現する。公演では音楽劇「バーション」のオリジナル曲「彩虹橋」が好評を博し、その曲が収録された通算10枚目のアルバム「神戸チャイナ倶楽部」を2010年12月8日に発売。

2011年4月からは、ABC ラジオにて毎週日曜日の朝8時40分～9時まで「伍芳の神戸再発見」でパーソナリティを務める。

吉田：マンドリンとは手首の角度が違うんですね。

ところでファンさんはマンドリン関係のコンサートに何度も出演されていますし、ドイツのマンドリンフェスティバルにも2回出演されていますが、マンドリンにはどんなイメージをお持ちですか？

伍芳：楽器の形も音色も可愛らしいですね。鳥の鳴き声のような感じもしますし、繊細な楽器だなと思います。それから、やっぱり「持って」弾けるというのがいいですね。私の楽器は大きいので、そういうところは羨ましく思います。

吉田：日本に来てとくに感じたことはありますか？

伍芳：そうですね。やはり中国と日本では音楽環境が全く違うと思いました。中国では伝統的に作曲家がいて、指導者がいて、そしてプレイヤーがいるという仕組みがきちりとあって、誰でもその中に位置づけられます。また、プロの音楽家は皆、楽団に所属して国家公務員のような扱いになります。とても保守的な感じですよ。

日本に来て、世界中のいろんな楽器のプレイヤーがいることに驚きました。音楽のジャンルや形態も様々で、ほんとに不思議な国だと思いました。日本では自由でのびのびした環境の中でやっていけますね。そのかわり、自由であることの厳しさはあります。お客さんの耳も肥えているし、自分に厳しくして、次々と新しいものを作っていかなければいけません。

吉田：ファンさんは実際に多くの新しい作品を作って来られていますね。誰か影響を受けた人はいますか？

伍芳：箏（ひちりき）の東儀秀樹さんとヴァイオリンの中西俊博さんです。

東儀さんは、同じ民族楽器を使って新しい音楽をされているところが面白いと思いますし、一度アルバムをプロデュースしていただいたことがあります。

中西さんはご自分のオリジナルオンリーで活躍されている方ですが、作曲することに対して私が持っていた壁を取り除いてくれました。私

は基本的にプレイヤーなので、正式に作曲を勉強したこともないし自信がなかったのですが、中西さんが「4小節だけでもいいから、とにかく書いてみなさい」「気持ちの動くままにすれればいいんだよ」と教えてくれました。中西さんのおかげで、堅苦しく考えず素直に作ればいいんだな、と思えるようになりました。それで、新しいアルバムを作るとき、皆に「オリジナル曲は書いたの？」とか期待されるのでどんどん作曲するようになりました。期待されるとけっこう頑張るほうなんです（笑）。

吉田：どんな時に作曲するんですか？

伍芳：そうですね。変な話ですが、お風呂に入っているときに鼻歌で歌ったメロディーを。お風呂は音響もいいし（笑）、「これはいいな」という感じでお風呂上りに書き留めたり録音することもあります。それから、たくさん練習して疲れたときに「譜面から脱出したい」という気分になって、好きなように弾いていると何かいいものが生まれてくることもあります。

吉田：ところで、ファンさんはいろんな方と共演されていますが、ここ数年は「宝くじまちな音楽会」で南こうせつさんと一緒に全国でコンサートされていますね。その他に、今までの思い出に残る共演者はありますか？

伍芳：何といっても、ケニー・Gさんですね。ハワイと日本ツアーの時に一緒しました。もともと個人的に大ファンだったので、CDも全部持っているんですよ。その中に中国の名曲の「ジャズミンフラワー」の録音もあったので、それをやろうということになって…。どう要求されても即座に弾けるように、あらゆることを想定して万全の態勢で挑みました。英語は全然わからなないけどメンバーの皆ともフィーリングで通じ合って共演させてもらい、夢のようなステージでした。今後の夢はヨー・ヨー・マさんです！（笑）。

吉田：夢ではないかもしれませんが、今後はどんな活動をしていきたいですか？

伍芳：今までは演奏活動中心にやってきました

が、今後は教育といいますか、古箏を弾く人を育てる活動にも力を入れたいと思います。演奏のほうは今まで通りオリジナルの作曲やアルバム作りも続けたいと思いますし、例えばダンスとか異なったジャンルの方とのジョイントも積極的に行っていきたくと思います。古箏の魅力を最大限に引き出していきたくなんです。

吉田：今も教室をされているそうですが、趣味で習われる方もいらっしゃるのですか？古箏は大人になってから習い始めても大丈夫ですか？

伍芳：大丈夫ですよ。もちろん、若い生徒さんのほうが上達は速いんですが…。でも、若い人と年配の方はウサギとカメみたいなところがあって、年配の生徒さんの上達はゆっくりなんです。精神力が安定していて一生懸命努力されるんです。発表会のとき、十分な練習量で堂々と演奏されるのは意外に年配の方のほうが多いですね。若い人は動きも素早いし、すぐ「できるわ」と思っていて失敗したりするので、最後はカメのほうに勝つことがあるんです。

吉田：それはいい話ですね。最後に「奏でる！マンドリン」の読者に何かメッセージをいただけますでしょうか。

伍芳：そうですね。マンドリンの方々には同じ弦楽器として親しみを感じます。「心の琴線」に触れる、繊細な響きの魅力的な楽器だと思います。私はこれまでに何度かマンドリンの合奏と共演させていただいたことがありますが、今後も機会があればぜひ一緒に演奏したいと思いますので、皆様よろしくお願いたします！

吉田：今日はありがとうございました。

■ 今後のコンサート予定 ■

宝くじまちな音楽会
南こうせつ with ウー・ファン
心のうたコンサート

●2012年7月8日(土) 三重県熊野市民会館

時間 開場 18:00 開演 18:30

問い合わせ先 熊野市民会館 0597-85-3742

●2012年7月29日(日) 愛媛県八幡浜市文化会館 ゆめ

おん

時間 開場 17:00 開演 17:30

問い合わせ先 八幡浜市文化会館 0894-36-3040